

唐津みなとまちづくりにおける市民による公共物製作の試行的取り組み

株式会社エスティ環境設計研究所 正会員 深川毅一

1. 目的

近年、我が国の各地域で行われているまちづくりでは、市民が行政とともに話し合いのテーブルに着き、地域が抱える課題の解決策を見出し、市民参加型のまちづくりが盛んに行われている。地方公共団体の財政状況が厳しさを増す中では、今後はより高次の市民参加型のまちづくりが求められる。

佐賀県唐津市では、港湾管理者である佐賀県の港湾計画の見直しを機に、市民と行政が唐津港の将来像について議論する「唐津みなとまちづくり懇話会(以下、懇話会)」が2004年に組織された。懇話会では今日まで、松原の植樹・育樹活動や、海辺の賑わい創出に向けたイベントの開催など、市民と行政による協働のまちづくりが行われている。

そのような動向の中、2010年に唐津東港地区に整備された公園に、高さ約3m、床面積約10㎡の倉庫の建設が懇話会で計画された。この臨海公園は、基本構想より懇話会の中で議論され、筆者が所属していた九州大学景観研究室(以下、九大景観研)はそのデザインに携わっていた。本来であれば、このような倉庫は公用地における建設であるため、設計から施行に至るまでを行政主導のもとで取り組まれていくものではあるが、倉庫が比較的小規模な建築物であることから、筆者らはより高次の市民参加のまちづくりを進めていくため、市民自らの汗を資本とした倉庫の製作を実践することを試みた。

本稿では、その試行的取り組みの中で取り入れた工夫や、生じた問題等に着眼しながら事業プロセスを紹介し、今後の地方公共団体のまちづくりにおける市民参加の一手法を提示することを目的とする。

2. 事業プロセス

2. 1. 倉庫建設事業に至るまでの経緯

懇話会で策定された「地域素案」の中で賑わい・交流の拠点とされている唐津東港地区は、佐賀県により公園として緑地整備が行われてきた。公園内の松原の創出に向け、市民による松の植樹祭が2007年より毎年行われており、その活動を運営する委員会として、懇話会の下部に「唐津みなと松原の会(以下、松原の会)」が発足した。

九大景観研は、2008年よりその公園のデザインに携わってきた。そのデザインでは、かつて国鉄の軌道敷を復活させ、その上を走るトロッコを子供達が利用できる遊具として設置することを考案した。トロッコの製作にあたっては、その材料費を地元の市民や企業を対象とした募金で賄うこととし、製作は筆者らが受け持つこととした。募金の目標金額は試算から30万円とした。

上記のことについて、筆者らは松原の会および懇話会で提案し、会議の中で了承された。松原の会では、製作後のトロッコの維持・管理・運営に関する意見が出され、その後の会議で協議していくこととされた。募金活動は「トロ

ッコ募金」と命名し、懇話会の取組みとして市民や企業、団体へ募金協力の呼び掛けを行った。その結果、募金は約46万円集まり、トロッコを製作することができ、公園の完成式典ではトロッコ運行イベントを開催した。

2. 2. 倉庫建設に向けた協議

松原の会では、トロッコ製作後の維持・管理・運営に関して協議が行われ、公園敷地内にトロッコを格納するための倉庫を建設することが決まり、建設に向けて以下の(1)～(3)について協議され、協議結果は懇話会で報告され、承認を得ることができた。

(1) 建設費用について

当初は、トロッコ募金の残金を建設費用に充てることとされたが、筆者らが倉庫の基本設計を行い、建設費用を試算した結果、材料費だけで約50万円必要であることが分かり、募金残金だけでは十分ではなかった。そのような中で、松原の会のメンバーが倉庫の建設案を、唐津市に営業所を構えているT社に話したところ、建設資材を現物支給して頂けることになった。材料費以外の費用については、設計は筆者らが行い、施工は筆者らが中心に行いながら、懇話会のメンバーを中心とした市民の汗で担保することとなった。但し、専門的な技術を要する工種については、専門の地元企業に業務を発注し、その費用を募金の残金で賄うことにした。

(2) 倉庫の構造及びデザインについて

筆者らが行った基本設計をもとに、松原の会では倉庫の構造やデザインについて議論が行われ、以下のことが倉庫の設計に取り入れることとなった。

- ・建設地が港湾地であるため風荷重に対する強度計算を行い、安全性を確保すること。
- ・床面積を10㎡以下とし、建築確認申請の手続きの手間を省くようにすること。
- ・軌道敷上に倉庫を設置し、トロッコがレールに載ったまま格納できるようにすること。
- ・小屋の両側に扉をつけ、将来的に軌道敷が延伸した際にトンネルとしての利用できるようにすること。
- ・トロッコ倉庫を松原の維持管理で使用する道具の収納庫としての活用できるようにすること。

(3) ソフト面の方策について

トロッコ及び倉庫の事業実施主体は懇話会であるため、それらの所有者となり維持・管理は可能であるが、運営については、懇話会でどのように取り組んでいくか結論は出なかった。そこで、トロッコが利用されることを重視し、建設地に隣接する大島保育園に倉庫の鍵を預け、自己責任のもと利用して頂くようにした。

2. 3. 施工までの段取り

筆者らは松原の会での協議を踏まえ、詳細設計図を作成し、施工開始前までに、以下の(1)～(3)の段取りを行った。

(1) 建設資材の手配

筆者らは、作成した詳細設計図から必要資材を積算し、資材提供を引き受けたT社にその内容を伝えた。T社が資材調達先とした企業には、筆者ら自らが本事業の主旨およびこれまでの唐津みなとづくりの経緯等について直接説明を行った。その結果、例えば木材の製材店からは施工素人でも用意な施工法のアドバイスを頂いたり、塗料メーカーからは通常市販されていない色の塗料を調合から製作して頂くことができたりするなどの、唐津みなとまちづくりに対するボランティア的な関わりを示して頂いた。

(2) 業者への施工依頼

瓦葺きなどの専門的な技術を必要とする工種については、専門とする地元企業に業務を発注した。資材調達先の企業と同じように筆者らは本事業の主旨を説明し、理解頂くことができた。それにより、通常よりも良心的な価格で施工を行って頂くことができた。

(3) 土地使用の手続き

建設地である公園の土地管理者である佐賀県に、懇話会より土地の使用許可および、土地使用料の減免を申請した。土地の使用許可は3年で更新される。佐賀県が加入している懇話会の活動の一環であることから、土地の使用料は発生せずに済んだ。

2. 4. 施工

施工は、基礎工、小屋組み、外壁取付け、瓦葺き、建具取付けの工程で実施した。施工素人による作業のため工法の容易化、単純化を図った。その工程の中で、①小屋組みにおける棟上作業、②外壁取付けにおける壁材塗装作業、③外壁取付けにおける壁材の取付け作業に、市民自らの手による施工を行った（写真1）。①には約25名、②には約15名、③には約10名の市民が作業を行った。①、②については問題なく作業を遂行することができたが、③については釘で板を定位置に打ち付けるという技術を要する作業であったため、作業を行った市民によって出来栄にムラが生じた。その他の作業で専門的な技術を要する工種以外は、主に筆者らが行ったが、市民の中には筆者らが取り組んでいる作業に加わったり、現場を覗きにきたりするなど、本事業への関心の高さが伺えた。工期は、当初約3週間で実施する予定だったが、施工ミスの発生に伴う工種の追加や修正作業による対応が発生し、完成まで約3ヶ月を要した。

2. 5. 完成した倉庫のデザイン

完成した倉庫を写真2に示す。建築様式は、唐津港が最も栄えた明治期を偲ばせる擬洋風建築とした。壁に杉板を鎧張りした下見板壁と、瓦屋根がその建築様式の特徴になっている。瓦は唐津の歴史に深く縁のある屋敷に使われていたものを再利用し、基礎石は松浦川に架かる橋の資材としてかつて使われていたものを再利用した。

2. 6. 完成お披露目式の開催

2011年11月12日に完成した倉庫のお披露目式を開催した。当日は、事業に携わった懇話会メンバーや企業をはじめ、多く市民や大島保育園の園児達が集まり、トロッコ倉庫の完成を祝った。

3. 結論

3. 1. 本事業に取り入れた工夫

筆者らが本事業を遂行する上で、工夫したことを以下に整理した。

- ボランティア施工を実行したり、建設資材を再利用したりするなどして費用の発生を抑えた。
- 事業に携わる企業に対し、まちづくりにおける事業の主旨を説明し、理解を頂くことで、ボランティア的な関わりを示して頂いた。
- 施工素人にとって難儀な作業を避けるため、施工法を容易化・単純化した。
- 建築確認申請のような事業実施にあたり必要とされる可能性のあった難儀な手続きを回避した。

3. 2. 本事業から得られた課題

筆者らが本事業を遂行する上で、得られた今後の市民による公共物製作の課題を以下(1)~(3)に示す。

(1) 柔順な工程管理を行うこと

施工期間が大きく伸びた直接的な原因としては施工ミスに伴う工種の追加・修整作業への対応が発生したためである。しかし、施工素人による作業であったため施工ミスが生じる可能性は高かったことから、施工ミスの発生により生じた作業に対する柔順な工程変更が対応できれば、施工期間の延長はそこまで大きくならなかったと考えられる。

(2) 市民の事業への参与を十分に促すこと

施工に携わった市民は最大でも懇話会メンバーの約半数であり、十分に参加を促すことができなかった。市民への参加の呼びかけ方や、施工への参加の機会を増やすことでより多くの市民の参加を促すことができたと考えられる。

(3) 市民の施工作業を適切にサポートすること

施工において技術を要する作業では、市民の施工ミスが目立った。市民の施工能力を過信せず、ミスを防ぐために経験者が作業方法を教えたり、市民が作業を容易に行えるようにしたりするなどのサポートを行う必要があったと考えられる。



写真1 市民による棟上作業の様子。素晴らしいチームワークにより、順調に作業は行われた。



写真2 完成した倉庫。